

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24530924

研究課題名(和文) 仮名・漢字表記語の読みにおける音韻情報の役割

研究課題名(英文) The role of phonological information in the reading of Japanese kana and kanji words

研究代表者

日野 泰志 (Hino, Yasushi)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：00386567

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、仮名・漢字語を読む際の処理差について検討した。仮名・漢字語を読む際には、いずれの場合も、音韻情報が自動的に活性化され、語の形態親近性が高い場合には形態情報から、直接、意味情報が活性化されるが、語の形態親近性が低い場合には、音韻情報を介して意味情報が活性化されることが明らかとなった。一方、音韻-形態対応の一貫性を測定したところ、漢字語は仮名語と比べて音韻-形態対応の一貫性が低く、さらに、この差は、語を読んだり、聞き取ったりする際の処理に効果を持つことが明らかとなった。このように、仮名・漢字語間の処理差を検討する場合、語の音韻-形態対応の性質の違いによる効果を考慮する必要があるだろう。

研究成果の概要(英文)：In order to address the issue of whether Japanese kana and kanji words are read differently, I attempted to examine 1) whether automatic phonological activation arises for kana and kanji words, 2) whether different semantic activation routes are used for kana and kanji words, and 3) whether the nature of phonological-orthographic (P-O) relationships is different for kana and kanji words. The results suggested that, for both kana and kanji words, 1) automatic phonological activation arises early in processing and 2) semantic activation arises directly from orthography when the orthographic forms are familiar, whereas semantic activation arises via phonology when the orthographic forms are unfamiliar. When the P-O relationships and the effect of P-O consistency were examined, however, the difference did emerge for kana versus kanji words. These results indicate that P-O consistency must be taken into account when considering the processing difference for kana and kanji words.

研究分野：認知心理学・言語心理学

キーワード：自動的音韻活性化 音韻-形態対応の一貫性 意味符号化経路 仮名表記語 漢字表記語

## 1. 研究開始当初の背景

これまで、仮名表記語と漢字表記語の読みの処理は、質的に大きく異なると考えられてきた(e.g., Feldman & Turvey, 1980; Frost, 2005; Kimura, 1984; 斎藤, 1981; Wydell, Butterworth, & Patterson, 1995)。仮名文字は、各文字が固有の音(モーラ)に対応するため、仮名表記語は形態 - 音韻対応の一貫性が高いと仮定された。一方、漢字は一般に複数の読みを持つため、漢字表記語の形態 - 音韻対応の一貫性は低いと仮定されてきた。これに対して、語の形態 - 意味間の対応関係については、漢字表記語の方が仮名表記語よりも一貫性が高いと仮定されてきた(e.g., 伊集院, 2008, 10月)。漢字は形態素であるため、漢字を共有する語同士は、意味的類似性も高く(e.g., 男性, 男子), 形態 - 意味対応の一貫性も高いと仮定されたのに対して、仮名表記語では、文字の共有と意味の共有に相関はなく(e.g., ロケット, ポケット), 形態 - 意味対応の一貫性は低いと仮定されてきた。

こうした形態 - 音韻間及び形態 - 意味間の対応関係の性質の違いをもとに、これまで仮名・漢字表記語間では、音韻情報活性化の容易さが大きく異なる上に、意味符号化の際に使用される処理経路も異なると考えられてきた。形態 - 音韻対応の一貫性が高い仮名表記語の場合、音韻情報の活性化が容易であり(e.g., Feldman & Turvey, 1980; 斎藤, 1981), 語の読みの初期段階で音韻情報が自動的に活性化される(e.g., Chen, Yamauchi, Tamaoka & Vaid, 2007)。一方、形態 - 音韻対応が複雑な漢字表記語の場合、文字レベルからの音韻活性化はほとんど機能せず(e.g., Wydell et al., 1995), 音韻情報の自動的活性化も生じない(e.g., Chen et al., 2007)。その結果、漢字表記語を読む際には、形態情報から、直接、意味情報が活性化されるのに対して、仮名表記語の場合には、常に、自動的に活性化された音韻情報を介して、意味情報が活性化されると仮定されてきた(e.g., Chen et al., 2007; Kimura, 1984; 斎藤, 1981)。

しかし、最近、Hino et al. (2011)は、仮名表記語 339 語と漢字表記語 775 語を使って、形態 - 音韻対応の一貫性と形態 - 意味対応の一貫性を測定したところ、形態 - 音韻間及び形態 - 意味間の対応関係のいずれにおいても、仮名・漢字表記語間に、これまで仮定されてきたほど大きな一貫性の違いは認められなかった。これまで、形態 - 音韻間及び形態 - 意味間の対応関係の性質の違いを前提に、仮名・漢字表記語に対する音韻活性化や意味符号化経路の違いが仮定されてきたが、Hino et al. (2011)のデータは、これらの前提となる仮説を疑問視するものであった。したがって、仮名・漢字表記語間に異なる処理を仮定すること自体の妥当性も含めて仮名・漢字表記語を読む際の処理について再検討する必要が生じた。そこで、本研究では、語の読みの初期段階における音韻情報活性化及び

形態・音韻・意味間の交互作用の問題を取り上げ、仮名・漢字表記語間の読みの処理は本当に異なるのかどうか再検討を試みた。

## 2. 研究の目的

本研究では、仮名・漢字表記語の読みの処理の性質を検討するために、具体的には以下の三つのテーマに関する研究を行った。

### (1) 漢字語を読む際の自動的音韻活性化

第一のテーマは、語の読みの初期段階における自動的音韻活性化の問題である。これまで、仮名表記語の読みにおいて、音韻活性化が容易に生じることを示す証拠は多数報告されてきた(e.g., Chen et al., 2007; Feldman & Turvey, 1980; Kimura, 1984; 斎藤, 1981)。一方、漢字表記語の読みにおいて音韻活性化が生じるかどうかという問題については、一致した見解が存在しない。Chen et al. (2007)は、瞬間提示したプライムを伴う語彙判断課題において、漢字二字熟語による同音語ペア(e.g., 点字 - 展示)に対する成績は、統制ペア(e.g., 流浪 - 展示)に対する成績と変わらなかったが、プライムをひらがな表記すると(e.g., てんじ - 展示), 統制ペア(e.g., るろう - 展示)よりも有意に反応時間が短かったと報告している(i.e., 同音語プライミング効果)。この結果から、Chen et al. は、漢字表記語の読みでは、音韻情報は自動的に活性化されないと結論している。

しかし、仮名・漢字表記語の形態 - 音韻対応の性質があまり大きく異ならないなら(e.g., Hino et al., 2011), 漢字表記語を読む際にも自動的音韻活性化は生じる可能性がある。実際、中国語や日本語の漢字表記語を使った語彙判断課題において同音語効果が観察されることが複数の研究で報告されている(e.g., Chen, Vaid & Wu, 2009; Hino, Kusunose, Lupker & Jared, 2013; Ziegler, Tan, Perry & Montant, 2000)。そこで、本研究では、マスクされた同音漢字表記語プライムにより、漢字表記語ターゲットに対する語彙判断の成績に、有意な同音語プライミング効果が観察されるかどうかを検討することで、漢字表記語を読む際にも、自動的音韻活性化が生じるかどうかという問題の再検討を試みた。

### (2) 語の音韻 - 形態対応の一貫性

仮名・漢字表記語の読みにおける処理の性質を検討するための第二のテーマとして、本研究では、漢字・仮名表記語の音韻レベルから形態レベルへの対応関係の性質についての検討を行った。仮名文字は、語の読みを表すために作られた文字であり、モーラと仮名文字との間の対応関係は透明性が高い。一方、漢字には多数の同音文字が存在することから、漢字表記語の正しい綴りをその音韻情報から復元するのは、難しい可能性がある。そこで、本研究では、まず、仮名・漢字表記語の音韻 - 形態間の対応関係の一貫性の測定

を試みた。

後で詳しく述べるが、仮名・漢字表記語の音韻 - 形態対応の一貫性を測定したところ、漢字表記語は仮名表記語と比較して、音韻 - 形態対応の一貫性が著しく低いことが明らかとなった。そこで、語の音韻 - 形態対応の一貫性が語の読みや聞き取りの処理にどのようなインパクトを持つのかについてさらに検討するため、漢字表記語を使って音韻 - 形態対応の一貫性効果の観察を試みた。

### (3) 語の意味符号化経路の検討

さらに、本研究では、第三のテーマとして、仮名・漢字表記語の意味符号化の際に、音韻情報がどのような役割を果たしているのかという問題を検討するための研究も実施した。語を読む際、その語の意味ばかりでなく、その語と部分的に形態・音韻情報を共有する隣接語の意味も活性化される可能性が指摘されている(e.g., Forster & Hector, 2002; Rodd, 2004)。日本語の場合、ひとつの言語の中に複数の表記が存在することから、形態隣接語でもあり音韻隣接語でもある語ペア(e.g., サイズ - クイズ)と、音韻隣接語ではあるが形態隣接語ではない語ペア(e.g., ピンチ 団地)を見つけることができる。そこで、Hino, Lupker & Taylor (2012)は、関連性判断課題を使って、“質問 - サイズ” ペア及び“体育 - サイズ” ペアは関連がないと判断するのに要する反応時間を測定することで、隣接語の意味活性化による効果の観察を試みた。ターゲット語“サイズ”を読む時、その形態隣接語である“クイズ”の意味も活性化されるなら、“質問”と“クイズ”に関連があることから、“質問 - サイズ” ペアに対する“関連なし”反応は、“体育 - サイズ” ペアに対する“関連なし”反応よりも時間がかかることになる(形態・音韻隣接語条件)。一方、音韻隣接語を介して意味情報が活性化されるなら、“住宅”と“団地”は関連がある上に、“団地”は“ピンチ”の音韻隣接語であることから、同様の抑制効果が“住宅 - ピンチ”ペアに対する“関連なし”反応にも認められることになる(音韻隣接語条件)。Hino et al.の実験では、カタカナ語ターゲットを読む際には、形態隣接語の意味活性化による効果しか観察されなかったことから、カタカナ語を読む際には、形態情報から直接意味情報が活性化される可能性が高いと結論している。また、彼らの実験では、カタカナ語をひらがな表記して提示した場合には、音韻隣接語の意味活性化による効果が観察されたことから、カタカナ語のひらがな表記のように、語の形態親近性が損なわれた場合には、音韻情報を介して意味情報が活性化される可能性が高いと論じている。

そこで、本研究では、Hino et al. (2012)と同様の関連性判断課題を使って漢字表記語の形態・音韻隣接語の意味活性化による効果の観察を通して、漢字表記語の意味符号化の際に、音韻情報(および形態情報)がどのよう

な役割を果たすのかという問題の再検討を試みた。

## 3. 研究の方法

### (1) 漢字語を読む際の自動的音韻活性化

漢字語を読む際にも、自動的な音韻情報の活性化が生じるのかどうかという問題を検討するために、マスクされたプライムを伴う語彙判断課題(e.g., Forster & Davis, 1984)を使って、同音漢字表記語ペアに同音語プライミング効果が観察されるかどうかについて検討した。この課題の各試行では、まずマスク刺激が1秒間提示されると、マスク刺激がプライムに置き換えられた。さらに、プライムは50ms間だけ提示され、即座にターゲットに置き換えられた。実験参加者は、ターゲットに対する語 - 非語判断を求められた。この課題において、プライムとターゲットが同音語ペアの場合(e.g., 推移 - 水位)と関連なしペアの場合(e.g., 家電 - 水位)の成績を比較することで同音語プライミング効果の観察を試みた。ひとつの実験では、Chen et al. (2007)が使用した刺激ペアと同じものを使用し、もうひとつの実験では、新たに作成した刺激ペアを使用した。

### (2) 語の音韻 - 形態対応の一貫性

漢字表記語と仮名表記語の音韻 - 形態対応の一貫性の程度を比較するために、Hino et al. (2011)が使用した漢字表記語 775 語とカタカナ語 339 語を対象に、それぞれの語の1モラを別のモラに置き換えて作成される音韻隣接語を検索した。この検索には、Hino et al.が形態隣接語の検索に使用したのと同じ国立国語研究所(1993)を使用した。それぞれの語の音韻隣接語のリストを検索した後で、ターゲット語と音韻隣接語の間で共有されるモラが同じ文字で表記される音韻隣接語を形態一致隣接語、異なる文字で表記されるものを形態不一致隣接語と分類し、天野・近藤(2003)の出現頻度を使って、次の方程式により、各ターゲット語の音韻 - 形態対応の一貫性の値を計算した。

$$\text{音韻 - 形態対応の一貫性} = \frac{(\text{ターゲット語の出現頻度} + \text{形態一致隣接語の出現頻度総和})}{(\text{ターゲット語の出現頻度} + \text{すべての音韻隣接語の出現頻度総和})}$$

この方程式により計算される一貫性の値は0から1までの値をとり、0に近いほど音韻 - 形態対応の一貫性が低く、音韻情報を共有する別の語がターゲット語とは異なる文字で表記される傾向が高いことを示し、逆に、1に近いほど、一貫性が高く、音韻情報を共有する別の語がターゲット語と同じ文字を使って表記される傾向が高いことを示す。

本研究では、漢字表記語 775 語と仮名表記語 339 語の一貫性を計算した上で、仮名・漢字表記語間で一貫性の値の比較を試みた。

さらに、語の音韻 - 形態対応の一貫性は、語の読みや聞き取りの成績にどのような効果を生じるのかについて検討するため、漢字表記語を使って、語の音韻 - 形態対応の一貫性を操作した刺激セットを作成し、視覚的語彙判断課題・聴覚的語彙判断課題・低輝度刺激を使った視覚的語彙判断課題を実施した。

### (3) 語の意味符号化経路の検討

漢字二字熟語を読む際に、形態情報から、直接、意味情報が活性化されるのか、音韻情報を介して意味情報が活性化されるのかという問題を検討するために、Hino et al. (2012)と同様の関連性判断課題を使って、漢字熟語ターゲットが持つ形態・音韻隣接語の意味活性化による効果について観察を試みた。

この課題では、ターゲット語に先立って先行語が提示される。実験参加者は先行語とターゲット語の意味的関連性の有無についての判断を求められ、関連がある場合には、“関連あり”ボタン、関連がない場合には、“関連なし”ボタンをできるだけ迅速かつ正確に押すよう教示された。先行語とターゲット語との間に意味的関連がない刺激ペアに対して、ターゲット語の形態隣接語が先行語と関連している場合(e.g., 投薬 - 手製)、形態隣接語(e.g., 手術)の意味活性化が生じるなら、先行語とターゲット語ばかりでなく、先行語とターゲット語の形態隣接語との間にも関連がない刺激ペア(e.g., 人災 - 手製)に対する“関連なし”反応と比較して、反応が遅延が生じるはずである。この効果はターゲット語と形態情報を部分的に共有する形態隣接語の意味活性化により生じた効果であると考えられることから、ターゲット語に対して形態情報を介した意味活性化が生じたことを示す証拠と考えることができる。

一方、ターゲット語の音韻隣接語が先行語と関連している関連なしペア(e.g., 婦人 - 手製)の場合、ターゲット語を読む際、その音韻隣接語(e.g., 女性)の意味活性化が生じるなら、この刺激ペアに対する“関連なし”反応は、ターゲット語の音韻隣接語と先行語の間にも関連のない関連なしペア(e.g., 経緯 - 手製)に対する反応よりも、時間がかかるはずである。そして、この効果は、ターゲット語と音韻情報を部分的に共有する音韻隣接語の意味活性化によれる効果であると考えられることから、この効果が生じる場合には、音韻情報を媒介とした意味活性化が生じた証拠と考えることができる。このように、ターゲット語に対する形態・音韻隣接語の意味活性化による効果の有無を検討することで、漢字熟語ターゲットの意味活性化に直接経路と音韻媒介経路のいずれが関与しているのかという問題について検討を試みた。

ところで、語の意味活性化経路は、語の形態親近性に依存して異なるとする提案がなされている(e.g., Hino, Lupker & Tayler, 2012; Jared & Seidenberg, 1991)。そこで、本研究で

は、ターゲット語の出現頻度を操作した上で、その形態・音韻隣接語の意味活性化による効果の観察を試みた。

## 4. 研究成果

### (1) 漢字語を読む際の自動的音韻活性化

マスク下の同音語プライミング効果についての観察を試みたところ、Chen et al. (2007)による刺激セットを使用した場合にも、新たに作成した刺激セットを使用した場合にも、いずれも有意な同音語プライミング効果が観察された。これらのデータは、漢字熟語を読む際にも、自動的音韻活性化が生じていることを示唆するものであった。この研究は、認知心理学研究に掲載された(楠瀬・中山・日野, 2013)。

### (2) 語の音韻 - 形態対応の一貫性

漢字表記語 775 語とカタカナ表記語 339 語の音韻 - 形態対応の一貫性を計算したところ、漢字表記語とカタカナ表記語の一貫性の平均値は、それぞれ.27 と.83 だった。しかし、一貫性を計算する際に、音韻隣接語を持たない語を含めると、一貫性の値が過大評価されてしまう可能性があることから音韻隣接語を持たない語を全て除去した上で、漢字表記語 722 語とカタカナ表記語 153 語の音韻 - 形態対応の一貫性の平均値を計算し直したところ、.62 と.21 だった。このようにいずれの場合も、カタカナ表記語に対する音韻 - 形態対応の一貫性の方が漢字表記語に対する音韻 - 形態対応の一貫性よりも大きかった。ここで使用した漢字・仮名表記語は、Hino et al. (2011)が形態 - 音韻対応の一貫性と形態 - 意味対応の一貫性を比較するために使用したのと同じである。Hino et al. は、形態 - 音韻間にも、形態 - 意味間にも、漢字・仮名表記語間に大きな一貫性の違いを観察することができなかった。ところが、音韻 - 形態対応の一貫性を測定したところ、明らかに漢字表記語に対する一貫性が仮名表記語に対する一貫性よりも著しく低かった。漢字には、多くの同音文字が存在するため、漢字表記語と音韻情報が部分的に共有される音韻隣接語の中には、多くの同音漢字で表記される漢字表記語が含まれることになる。その結果、漢字表記語の音韻隣接語には形態不一致音韻隣接語が多く含まれることになり、音韻 - 形態対応の一貫性が低くなったものと思われる。

一方、カタカナ表記語の音韻隣接語は漢字表記語ばかりでなく、カタカナ表記語も含むことから、音韻隣接語の中に、形態一致音韻隣接語が含まれており、一貫性が比較的高く維持されたものと思われる。

次に、漢字表記語を使って音韻 - 形態対応の一貫性を操作し、視覚的・聴覚的語彙判断課題を使って一貫性効果の観察を試みた。その結果、聴覚的語彙判断課題においてのみ有意な一貫性効果が観察された。

視覚課題では一貫性効果は観察されず、聴覚課題においてのみ有意な効果が観察されたというデータパターンは、他言語による先行研究の結果と一致していた(e.g., Peereman et al., 1998; Ziegler et al., 2008)。こうしたデータパターンを説明するために、Ziegler et al. は、二つの仮説を提案している。

形態・音韻間に交互作用を仮定した説明と交互作用を仮定しない説明である。形態・音韻間の交互作用を仮定しない説明によれば、視覚刺激に対しては、音韻情報は活性化されるものの、活性化された音韻情報から形態レベルへのフィードバックは機能しないと仮定する。同様に、聴覚刺激は、対応する形態情報を活性化するものの、活性化された形態情報から音韻レベルの処理に対するフィードバックは機能しないと仮定する。そのため、聴覚刺激に対しては、容易に音韻・形態対応の一貫性効果が観察されるのに対して、視覚刺激に対しては、一貫性効果は観察されないことになる。

もう一方の、形態・音韻間に交互作用を仮定する説明では、聴覚刺激が与えられると、それに対応する形態情報が活性化され、課題成績に効果を持つばかりでなく、視覚刺激が与えられた場合にも、活性化された音韻情報から形態レベルへのフィードバックが機能するが、視覚刺激が提示されている場合、課題遂行に必要な形態情報は視覚刺激から直接抽出可能なため、音韻フィードバックによる効果が観察されにくいと説明する。

この二つの説明のうち、どちらがより妥当な説明であるのかを検討するために、同じ漢字刺激を使って、視覚刺激を低輝度提示する語彙判断課題を行った。視覚課題においても音韻フィードバックが機能するなら、視覚刺激を低輝度提示すると、視覚刺激から直接に形態情報を抽出しにくくなるため、音韻フィードバックによる効果が観察され易くなるものと予測される。したがって、交互作用を仮定する説明が正しいなら、低輝度視覚刺激を使った語彙判断課題では、一貫性効果が観察されるはずである。

刺激を低輝度で提示すると、全体の反応時間が長くなった。さらに、この課題では有意な一貫性効果が検出された。同様の効果は、視覚刺激を瞬間提示して、その刺激に対する同定を実験参加者に求める知覚同定課題においても観察された。

以上のデータから、語を読んだり、聞き取ったりする際には、音韻レベルと形態レベルとの間に確かに交互作用が機能していることが確認された。これらのデータは研究論文として *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance* に掲載された(Hino, Kusunose, Miyamura & Lupker, 2017)。

### (3) 語の意味符号化経路の検討

漢字表記語の形態・音韻隣接語の意味活性化による効果を観察するために、Hino et al.

(2012)と同様の関連性判断課題を行ったところ、低頻度漢字表記語を対象とした実験では、形態隣接語の意味活性化による効果と音韻隣接語の意味活性化による効果の両方が観察された。そこで、ターゲットの形態親近性に依存して、使用される意味活性化経路に違いが生じるかどうかを検討するために、ターゲットの漢字表記語の出現頻度を操作し、高頻度漢字表記語と低頻度漢字表記語に、それぞれ音韻・形態隣接語の意味活性化による効果が観察されるかどうかを検討した。

音韻隣接語の意味活性化による効果は、低頻度漢字表記語ターゲットに対してのみ観察され、高頻度漢字表記語ターゲットには観察されなかった。一方、形態隣接語の意味活性化による効果は、低頻度漢字表記語ターゲットにも高頻度漢字表記語ターゲットにも観察された。

これらの結果から、漢字表記語を読む際には、低頻度語の意味活性化では、形態情報による直接経路と音韻媒介経路の両方が使用されるのに対して、高頻度語の意味活性化は、直接経路のみが利用され、形態情報から、直接、意味情報が活性化される可能性が高いことが明らかとなった。この研究データは、今後、論文にまとめて海外の専門誌に投稿・出版を予定している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

楠瀬悠・中山真里子・日野泰志 (2013). 漢字熟語におけるマスク下の同音語プライミング効果. *認知心理学研究*, 11, 11-19.

井田佳祐・吉原将大・薛俊毅・楠瀬悠・佐藤ひとみ・日野泰志 (2014). 漢字語の命名における形態・音韻対応の一貫性及び音・訓読の効果. *認知心理学研究*, 11, 117-126.

日野泰志 (2015). 仮名・漢字表記語の性質と読みのプロセス. *立命館文学: 藤健一教授退職記念論集*, 641, 165 - 181.

Kusunose, Y., Hino, Y., & Lupker, S. J. (2016). Masked semantic priming effects from the prime's orthographic neighbours. *Journal of Cognitive Psychology*, 28, 275-296, doi: 10.1080/20445911.2015.1134542.

Hino, Y., Kusunose, Y., Miyamura, S., & Lupker, S. J. (2017). Phonological-orthographic consistency for Japanese words and its impact on visual and auditory word recognition. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 43, 126-146. doi: <http://dx.doi.org/10.1037/xhp0000281>.

〔学会発表〕(計 13 件)

Hino, Y., Kusunose, Y., Lupker, S. J., & Jared D. (2012, November). The processing advantage and disadvantage for homophones in lexical decision tasks. Presented at 53rd Annual Meeting of the Psychonomic Society, Minneapolis, MN, U.S.A.

日野泰志・楠瀬悠. (2012, 9 月). 語彙判断課題における同音語の促進効果と抑制効果. 日本心理学会第 76 回大会, 神奈川.

Kusunose, Y., Nakayama, M., & Hino, Y. (2013, November). Masked homophone priming effects for Japanese kanji words. Presented at 54th Annual Meeting of the Psychonomic Society, Toronto, ON, Canada.

井田佳祐・吉原将大・薛俊毅・楠瀬悠・佐藤ひとみ・日野泰志. (2013, 9 月). 漢字語命名における形態 - 音韻対応の一貫性及び音・訓読の効果. 日本心理学会第 77 回大会, 北海道.

日野泰志・楠瀬悠. (2014, 9 月). 仮名・漢字表記語の音韻 - 形態間の対応関係の性質. 日本心理学会第 78 回大会, 京都.

楠瀬悠・日野泰志. (2014, 9 月). 漢字表記語の読みにおける音韻活性化. 日本心理学会第 78 回大会, 京都.

Yashihara, M., Hino, Y., & Kusunose, Y. (2014, November). How is TURPLE effect modulated by word frequency of orthographic neighbors? Presented at 55th Annual Meeting of the Psychonomic Society, Long Beach, CA, U.S.A.

日野泰志・楠瀬悠. (2015, 9 月). 語彙判断課題における漢字語の音韻 - 形態対応の一貫性効果. 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋.

楠瀬悠・日野泰志. (2015, 9 月). 隣接語の意味活性化による漢字語の意味検索経路. 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋.

Hino, Y., Kusunose, Y., & Lupker, S. J. (2015, November). Feedback consistency effects for Japanese Kanji words in auditory and visual tasks. Presented at 56th Annual Meeting of the Psychonomic Society, Chicago, IL, U.S.A.

Hino, Y., Mizukoshi, R., Yoshihara, M., Ida, K., Xue, J. (2016, August). 特別講演 2: Effects of family size and character length for kanji compounds. 第 19 回認知神経心理学研究会, 広島.

Kusunose, Y., Hino, Y., Ida, K., & Lupker, S. J. (2016, November). Effects of semantic activation for orthographic and phonological neighbors in

the reading of Japanese kanji words. Presented at the 57th Annual Meeting of the Psychonomic Society, Boston, MA, U.S.A.

楠瀬悠・日野泰志. (2016, 8 月). 漢字語を読む際の意味活性化経路. 第 19 回認知神経心理学研究会, 広島.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
出願年月日 :  
国内外の別 :

取得状況 (計 0 件)

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
取得年月日 :  
国内外の別 :

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

日野 泰志 (HINO, Yasushi)  
早稲田大学・文学学術院・教授  
研究者番号 : 00386567

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号 :

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号 :

### (4) 研究協力者

楠瀬 悠 (KUSUNOSE, Yuu)  
井田 佳祐 (IDA, Keisuke)  
吉原 将大 (YOSHIHARA, Masahiro)